事前学習から事後学習までつながる長崎SDGs平和ワークショップ

（一社）長崎国際観光コンベンション協会
事業部　部長
古賀　典明

「長崎SDGs平和ワークショップ」という学習プログラムをつくりましたが、決して先進事例でもありませんし、まだ始まって1年という状態なので、何か探究学習の一つのヒントになっていただけたらいいなと思って発表させていただきます。

自己紹介ですが、元旅行会社勤務で、海外勤務が長かったのですが、シンガポールにいるときに観光地域づくり、まちづくりにすごく興味が出てきました。その後、社内でも開発とか地域創生という部署を希望していたのですが、もっと大きい仕事がしたいというか、地域に貢献したいと思うようになり、縁があって長崎国際観光コンベンション協会に今参画しています。

修学旅行に関して言うと、学生さんは将来のリピーターということで、修学旅行で長崎に来て、その記憶を持って大人になったときに、恋人と一緒に来るとか、結婚して家族ができて長崎に来るとか、必ず将来また長崎に来ていただきたい。そのきっかけとなるのが修学旅行であると考えているので、修学旅行の重要性を強く感じています。

なぜこのプログラムをつくったのかということですが、2つ理由があります。1つは、学習指導要領の改訂に伴い、それにどう対応するかということです。

主体的な学び、対話的な学び、深い学びとありますけれども、修学旅行で考えたときに、学生さんが自分たちで考えてやる、受け身ではないというところは主体的なものだと思いますし、現地の方との交流が対話的な学びになります。対話的というと、現地の方と話をするだけではなくて、グループワークをすれば学生さんたちの中でも対話が生まれると思っています。

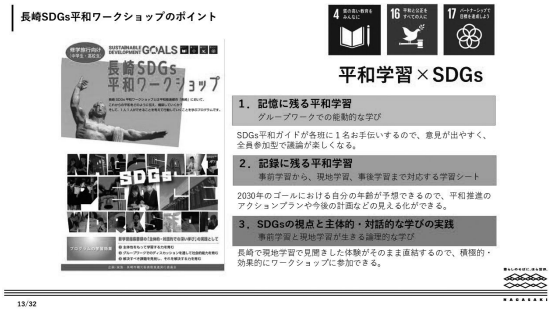
どうしても修学旅行は、ガイドの案内についていったり、何となく見て聞いてというところで留まりがちです。しかし、そこに話をする機会、自分と違う意見を聞く機会、そして修学旅行が現地学習だけではなくて、事前と事後の学習とくっつけることができれば、学びの範囲が広くなり、学びの深さが深くなるのではないかと思い、それを修学旅行の中でプログラム化していくべきだと感じています。

長崎はたくさんの方に修学旅行に来ていただいているのですけれども、改めて、自分たちで何が長崎のポイントなのかをまとめ直してみました。平和学習、歴史学習、探究的な学習、コンパクトシティという小さい町の中に文化的な要素や歴史的背景など、いろいろな要素を持っているというのが長崎のポイントで、やはり平和学習というのが一つ大きい軸ではないかなと思います。

2つ目の理由としては、旧態依然とした平和学習プログラムが繰り返されていることにあります。時代やニーズの変化と併せて、このタイミングで新しい方向性をつくっていこうということで造成したのが、長崎SDGs平和ワークショップです。

このワークショップには、3つポイントがあります。1つ目は、記憶に残る平和学習。僕は福岡出身で、小学校の修学旅行で長崎に来ましたが、全く覚えていません。覚えているのは、平和祈念像の形をした貯金箱を買って今でも家にあるぐらいで、原爆資料館の記憶もほとんどありません。なので、やはり長崎に来た学生さんに、修学旅行の経験や体験を覚えていただきたい。覚えるためには、自分が積極的に関わる機会が必要ではないかと思っています。

2つ目は、記録に残る平和学習。学びの履歴として、自分がやっていることが、形に残ったほうがいいのではないかと。SDGs平和ワークショップのワークシートには、事前学習、現地学習、事後学習という項目があって、そこに学んだことやメモを書き込めるように作っているので、それをぜひ使っていただきたいと思っています。SGDsは2030年のゴールが設定されていますが、2030年は、中学校、高校の学生さんたちにとって、成人したタイミングだと思います。自分が社会人になったときに、どういう世の中になっていてほしいのか、そのときに自分はどう振る舞うのか、そういったものを自分事にするという意味でも、ワークシートを使って学習の履歴を残す、自分の2030年のゴー



ルの姿を書くということは、とても有意義なことではないかと思います。

最後は、ＳＤＧｓの視点と主体的・対話的な学びの実践ということで、やはり現地で見聞きした経験が、その場で活用できる、生きた平和学習になるということも重要なポイントです。

この学習プログラムは90分しか時間がありませんので、最初にオリエンテーションを行い、グループワーク、そして最後に発表と総括を行うという流れになっています。

オリエンテーションでは、まずプログラムの目的と、どのようにやっていくのかという説明をするのですが、僕らが重視しているのは、長崎における平和推進の状況と課題の説明です。特に長崎の学生が取り組んでいる平和推進の活動が、参加している中学校とか高校の生徒さんたちに、長崎の自分たちと同い年の人たちがこういうことをしているんだ、では、自分たちはこんなことができるのではないかとか、自分事に感じていただきたいので、そういった同世代の取り組みを説明しています。また同時に、平和推進には課題もあるということも伝えて、それを基にグループワークに移っていただきます。

このグループワークでは、各班に1人ガイドが付きます。このガイドは、約半分が地元の平和ガイド（被爆遺構エリアを案内するガイド）で、あと半分は地元のホテルスタッフに担っていただいています。学校からも、せっかくガイドがいるのだったら、学生さんたちと近い世代のほうが話をしやすいと言われていて、実際に平和ガイドをやっている高齢の方のほうが思いが強いのですが、学校側のニーズもくみ取って、若い方にもガイドとして活躍していただいています。

最後は、発表まで行くのですが、これは学校と話をして、全部の班が発表することもあれば、一部の班だけということもあります。正直90分しかないので、ワークショップだけで完結するとは我々も思っていません。やはり、現地で学んだことをぜひ事後学習で、または学習シートに記入していただいて、学校に戻ってから行っていただきたいという話をして終わります。

下記はいくつかの班が作った模造紙のイメージですが、作られたものは全て学校に送っています。長崎の修学旅行の多くは、長崎市の後はハウステンボスや雲仙など他のところに行くため、その場でお渡ししても大変だろうということで、学校に郵送しております。学校では、保護者会や文化祭などで、発表に使っているということも聞いております。

本当に十人十色というか、様々なガイドがいますが、生徒さんが主役のため、基本的にファシリテーターの役を担わせています。例えば、グループの中で核兵器について考えるとなったときに、ファシリテーターとしてガイドがどう振る舞うべきかというと、ポスターを見て、「核爆弾が1万２０００発もあって、これをゼロにはできないよね、難しいよね、でも反対していくことはできるのではないか」というような意見があったとき、ガイドが、「長崎では高校生が1万人署名活動をやっていますよ」という話をすると、では自分たちでもやってみようか、自分たちだったらもしかしたら10万人活動できるかもしれないとか、そういう気づきを与える役割として、頑張っていただいています。

今後については、令和三年に造成し、令和四年が1年目、令和五年が2年目です。その中で、ガイドの教育・育成も今後継続してやっていこうと思っておりますし、ニーズが高まっていることを感じていますので、来年はＳＤＧｓ先進校の受入れもやっていきたいと思います。

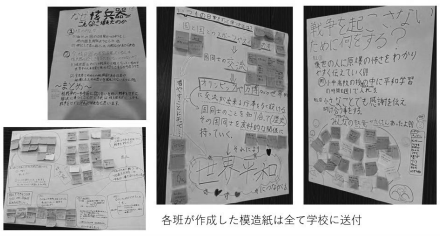
修学旅行の実施とオンラインの活用ということで、いま新しい修学旅行の形ができてきているのかなと思っています。それは、コロナ禍を経て修学旅行ができるようになったことと、コロナ禍の中でできることが分かったオンラインの活用、この2つを併用していくことが、今後の修学旅行、探究的な学習を含めた大きな流れではないかと感じています。コロナ禍でできなかったことと、コロナ禍でできるようになったこと、そして現地ならではの体験、これが記憶と記録に残る新しい修学旅行ではないかと考えています。

長崎には核兵器廃絶研究センターというものがありますので、専門家の力も借りて、最後の被爆地として核兵器をなくすということをテーマに掲げて、この学習プログラムをよりブラッシュアップしていきたいと感じております。

ぜひ皆さん、長崎に修学旅行でお越しください。しっかり受けさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

プログラムの流れ

3．発表とまとめ（10～15分）



各班が作成した模造紙は全て学校に送付

18/32